1456号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.8.5
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

北海道への旅、三度目

木幡智恵美

17

靴の裏が真っ平、つるんつるんだったのだ。数日前、雨の中を歩き、最近買って履き出した靴が濡れたので古いのを出した。その靴は履き心地が良く、ずいぶん長く使っていた。足の裏のほんのすぐ下に地面を感じるくらいまでになったので、百均で買った靴の中敷きを入れて履いていた。改めて靴裏を見ると、真ん中付近は透けて中敷きが見えるくらいになっている。おそらく、あの何が何だか分からない瞬間、つるつるになった靴底が滑ってアクセルの方に足が行ってしまったのではないだろうか。気に入っていたが、さすがにもう使えない。中敷きを抜き、底がつるつるの上に穴まで空いた靴をゴミ箱に放り込んだ。

確かなことは分からないが、靴の裏のせいで滑った可能性はある。でも、それで私の気持ちが晴れはしなかった。実際に、事を起こしてしまったのだから。車庫のコンクリートについていたブレーキ痕は、車に付いている制御装置が働き強制的に止めた際についたものだ。私は無能にも、なすすべもなく、なるがままに事を任せただけだった。そうした自分の無能ぶりが、心の中に大きな塊となって居座っている。

寛大と実歩が無事だったからよかったものの、もしかのことがあったら私はこの先前を向いて生きてはいられなかっただろう。若い頃、長男と二男を後部座席に乗せていて、信号機前で泊まっていた時にぶつけられたことがあった。あの時はルームミラーで減速した後ろの車がゆるゆると走ってくるのが見えた。今回私が引き起こした事故は、車庫付近のあらゆるものをなぎ倒してしまうほどのスピードによるものだったのだ。

夫は、「車庫内で良かったよ。これが一般道だったら大変だった。いい方に考えればいいよ」と言ってくれるが、自分の心がぐちゃぐちゃになってしまっている。そして、そのぐちゃぐちゃの中にはっきりと見えたのが、「老い」という文字だった。咄嗟に何が起きたか分からない。ニュースに出た事故の老人たちも、きっと私と同じ状態だっただろう。「老い」という現実。じりじりと真綿のように私の首を絞めつけてきたものが、声も出ないくらい一気に締めつけてきたのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

高座名　2

高座に一人で上がり、お客様に相対して何かしら話す。同種の表現は世に数多あるのだろうが、それを極限までシンプルにしたものが落語だと思う。長い時間をかけて洗練されていった話を聞かせるのが基本ではあるが、それがすべてではない。最低限の形式さえ守れば、できることは驚くほど広がる。落語教室と銘打っているのでどうしても落語を中心に据えるが、本心ではイメージにとらわれず好きなようにやってくれ、と思っている。

惜しくも今年の一月亡くなってしまったが、林家正楽は生涯紙切り芸一筋だった。何度か高座を見たが、紙を切っている間、客の息が詰まらない程度にわずかにしゃべり、体を揺するだけなのに、不思議と見入ってしまう。切り絵ができて額に収めて見せると、客はそこに物語を読み取り、オチを理解して安堵する。言葉を使わないというだけで、これもりっぱな落語だ。

落語の歴史をひもとけば、圓遊のステテコ踊りだの猫八の動物ものまねだの、形式内で多種多様な表現が行われてきたのだし、固定されるのをいやがる精神はいつだって何かを生み出す。

教室生にぬり江という子がいる。名前を決めるから好きなものを言ってごらん、と聞いたら塗り絵と答えた。言葉の響きが名前っぽいから、ああおもしろいじゃない、とすぐに決まった。絵じゃなくて塗り絵が好きなのかと尋ねると、あまりはっきりとは答えなかったが、どうやら色を塗るほどには絵を描くのに自信がなさそうに見えた。

正楽のように、客からお題をもらってその場で切り絵にして見せるというのはできないけれど、制作部分を省いたところはできる。マクラとして絵を見せたらどうかと勧めた。しばらくは、桜や梅など季節の植物の下絵に色を塗ったものを見せて、どんな工夫をしたかなどを話していたが、べったりとした等質の線は檻となってぬり江を閉じ込めているように思えた。

ところが、稽古場でお客さん相手に見せているうち、やがて塗り絵ではない描画も交ぜるようになり、ついには一から描いたものだけになった。いろいろな技法を試してみることにも貪欲で、上達も著しい。このごろは、絵にちなんだなぞかけやクイズも勧めてみたら、喜々として取り組んでいる。

「もうぬり江という名前じゃ合わなくなったね」

と言ったら、にっこり笑った。ぬり江という名には、名付けたときの自己認識が閉じ込められている。お客さんと関わることでそれに裂け目が生じ、塗り絵では満足できない自分が現れた。名付けたことをきっかけにそれを乗り越える、そんな高座名もある。

30代フリーター　三上治がこんなことを書いている。

「ウクライナ戦争が世界の動きの見通しを困難にしている。世界の動きと今後の見通しが困難になっていることは今に始まったことではないにしても、それを加速させたのがウクライナ戦争であることは確かである。ここにはマルクス主義の世界史観が影響力を失い、指南力のある史観が不在であり、空白であることも作用している」

（『教養としての文明論』（呉座勇一・與那覇潤））

年金生活者　なぜ今どきロシアはあんな古典的な侵略戦争を始めたのか、それを止められなかったこの世界はいったいどうなっているのか、そしてこの先どうなっていくのか。この疑問に対する明快な答えはまだだれからも、どこからも聞こえてこない。三上が「ウクライナ戦争が世界の動きの見通しを困難にしている」と言っているのはそういうことだと思う。

彼は、世界が見えにくくなっているのは「マルクス主義の世界史観が影響力を失い、指南力のある史観が不在であり、空白であることも作用している」と言う。それは、唯物論的だった世界の構造が唯心論的なそれに変わったことを意味する。資本主義の牽引車が、モノをつくる第2次産業から、情報や感情、すなわち心をつくる第3次産業にかわり、ハードな社会からソフトな社会に変わったことが背景にある。

30代　それなら、侵略戦争という超ハードな事態が起きたのは矛盾ではないか。

年金　ソフトになったからこそ、言い換えれば、つかみどころがなくなったからこそ、「何でもあり」の状態を招きやすくなったと言える。東西冷戦時のような、まだハードの論理が支配的だった時代は、ハードな所業が何を引き起こすかが比較的よく見えていたので、それが抑制されていた。

ソフトの論理が支配的な世界では、そうした計算が難しくなった。ロシアは作戦を開始してしばらく時間が経過してからようやく計算の誤りに気づいた。というより計算などできないことを思い知った。唯物論的な世界を、打ち上げたロケットの行方が計算できる物理法則の支配する世界にたとえれば、唯心論的な世界は、飛ばした風船がどこへ行くのかわからない状態にたとえることができる。

30代　プーチンはどんな計算をしていたんだ。

年金　ロシアのウクライナ侵略の特徴は、これほど不当性のはっきりした戦争はめずらしいのに、その動機が不可解なことにある。

ロシアは「ザ・侵略」と言っていいほどの、絵に描いたような、教科書的な侵略戦争を始めた。世界中から非難されることはわかりきっているのに実行したのは、それが最も有効な戦争の仕方だと判断したからだと考えるほかない。

だれが見ても侵略と判断するような戦争をする国はほとんどないはずだ、と思われているのが現在の世界だ。そのことを前提に、各国政府は国家を運営し、諸国民は日々の生活を続けている。それは侵略らしい侵略を警戒していないこと、したがってそれに抵抗する覚悟も備えもできていないこと、要するにそのような侵略に対して諸国家も諸国民も脆弱だということだ。そうロシアは判断したのだろう。その点、自分たちは警戒も覚悟も備えも強さも欠いていないから、攻めれば圧勝するだろう、と。

30代　恐ろしい判断だ。

年金　世界の戦争の本流は第2次世界大戦を最後に、破壊力をぶつけ合う流血の戦争から、抑止力を競い合う無血の戦争に移った。東西冷戦はその最初の世界戦争として戦われた。

この戦争のあり方の変化もハードからソフトへの変化ととらえるなら、それはさっき言った産業資本主義からポスト産業資本主義への転換と対応している。それは世界の原理が流血から無血に変わったことを意味する。

ロシアはその流れに「逆張り」をした。それで一気に大儲けするはずだった。だが、その目算は外れた。世界の戦争の本流となった「無血の戦争」の一面しか見ていなかったからだ。すなわち流血を厭う面だけを見て、それを臆病とか弱腰とあなどった。

無血の戦争には別の面があることをロシアは理解できなかったか無視した。別の面とは流血の戦争を許さないという理念であり、そのために膨大な軍備が蓄積されているという現実を指す。侵攻開始1週間後の国連総会では193カ国中141カ国が賛成してロシア非難決議を採択した。アメリカを先頭にした西側諸国はこれまでため込んだ武器をウクライナに提供し、無血の戦争のもうひとつの武器である経済制裁を続けている。

30代　ロシアにとってはまさかの事態だろう。

年金　おそらくロシアの戦争観は流血の戦争が世界の戦争の本流だった時代の残滓を引きずったままだと思われる。NATOは流血を回避する抑止力の集合体なのに、ウクライナがそれに加盟すると、自国が侵略されるかもしれない、と恐れたところにそれがあらわれている。だから、見通しを誤った。そして西側諸国も見通しを誤った。無血の戦争の時代にまさかここまで露骨な侵略戦争を始める国があるとは思わず、ましてその侵略戦争が無血の戦争の時代ゆえに起きることなど夢想もしなかった。

ニュース日記　933

中村　礼治

流血の戦争と無血の戦争